

19 世紀入華宣教師 J. L. ネヴィアスの栄光と影

宮田和子

Abstract: Most of the preceding articles pertaining to Rev. J. L. Nevius and his wife, have dealt with the bright side of their lives in the 19th century China. One of the chief purposes of this paper is to dig up the hidden facts, making use of the Chinese Recorder, which contains precise records of what the protestant missionaries did, wrote and how they acted.

Young missionaries, inspired in part by the lives of J. L. Nevius and his wife, were fascinated by the vision of converting heathens. They crossed the oceans only to have their expectations jolted by the reality of the situation.

J. L. Nevius and his wife had not been successful at all. Their administration was in chaos. Their native helpers were not completely committed to the new faith, although J. S. Nevius and his wife indulgently believed they were. They behaved as they pleased and not as they should.

Key Words: New Method, Tracts, Demon Possessions, The Chinese Recorder, Failure

はじめに

ネヴィアス (John Livingston Nevius, 倪維思 1829~1893) は、日本では一応知られた人物といえるだろう¹。来日経験を通じて、ヘボン (James Curtis Hepburn, 平文 1815~1911) やブラウン (Samuel Robbins Brown, 1810~1881) と交流があり、『万国公法』の訳者として知られるマーティン (William Alexander Parsons Martin, 丁韞良 1827~1916) とともに深い信頼関係で結ばれていた。吉田寅 1997:557~578 は、ネヴィアスの略歴を述べ、中国語著作の詳細な報告と彼の中国・日本における伝道活動を考察している。ネヴィアス夫人もまた理想の伴侶として知られ、夫妻は相携えて布教に尽力した。経験ゆたかなネヴィアスの説得力は強く、多くの若き欧米人信徒を

¹ 福音新報 65 号と 66 号に掲載された植村正久「日本の基督教文学」を参照。さらに小沢 1939 はネヴィアスと日本との関係をはじめてあきらかにした。

中国伝道にひきつけたが、現地の中国人を信頼しすぎて裏切られ、栄光の生涯はあえなく挫折する。

ネヴィアスにかかわる従来の研究は、おおむね彼の栄光の部分に焦点をあてたものであった。影の部分掘り起こすには、*The Chinese Recorder*² (以下'CR'と略称) の記述に俟たなければならない。

1. ネヴィアスの略歴

ネヴィアスの祖先³はオランダ人で、アメリカに渡って、主として農業に従事していた。本稿の主人公のネヴィアスは、Benjamin Nevius を父とし、Mary Denton を母として、1829年3月4日に生まれたが、生後1年半で父を失った。1853年26歳のときアメリカ長老会 (Board of the Foreign Missions of the Presbyterian Church in the United States) の宣教師となり、夫人 (Helen S. Coan Nevius, 倪戈 (?) ~1910) を伴って、寧波に着任した⁴。1856年夫人はのどの疾患で発声不能となり、療養のため帰米した⁵。その後回復して夫のもとにもどった夫人に、ネヴィアスは声よりもペンの力に訴えよ、と激励した⁶。

1859年伝道拠点を杭州に移したが、政情不安のため再度寧波にもどった。杭州滞在中に長老会からヘボン夫妻と協力して日本の伝道を開始するよう命令された。迷った彼はやむなく数か月を日本で過ごすことにきめて、上海を発って横浜に向かった。同派のよしみで成仏寺でまづヘボン夫妻と同居、やがて宗興寺に引っ越した。早速日本語研究にとりかかったが、この点では夫人のほうが熱心で、ネヴィアス自身は日本滞在中も中国語の著述に精進した。しかし当時切支丹禁制下の日本では、出版など思いもよらない。逆に中国では騒乱も絶え、キリスト教に門戸を開放していたので、条約5港にかぎらず伝道は可能であり、ネヴィアスは帰心矢のごとくという状態だった。確証はないが、本部の指示を待たずに横浜を離れたのではないかという憶測すらある。ともかく1861年横浜を出帆、途中下関に寄り、さらに長崎を訪れたのち、2

² 小沢 1944:275 に、ワイリー (Alexander Wylie 偉烈亜力 1815~1887) が 1867 年雑誌 *The Chinese Recorder* を創刊し、その編集長になった旨の記述がある。

³ 祖先については、夫人の手になる J.L.ネヴィアス回顧録 (*The Life of John Livingston Nevius for Forty Years a Missionary in China* (1895)第1章 pp.17~20 に詳しい。なお CR27:197~202 に同書に対する好意的な書評がでている。

⁴ 小沢 1939:1,2 夫妻は 1854 年 3 月 14 日に上海に着き、2 週間滞在して寧波に赴いた。

⁵ H.S.C. Nevius 1895: 114,115 夫妻は 1853 年 9 月 19 日 Bombay 号に乗船して米国を離れた。喜望峰をめぐる清国への長旅は想像を絶する苦痛を船客に強いた。

⁶ J.L. Nevius, & H.S.C. Nevius 1907: preface 'You can reach ten persons with your pen, where you can with your voice.'

月 17 日上海に着いた⁷。

以後ネヴィアスは中国語の著述に精魂を傾けた。夫人の健康に配慮して転々と住居を換え、1864年10月にはロンドンへ行った。1865年夫妻揃って帰米、滞米中に着手した *China and the Chinese* はつぎつぎに版を重ねた⁸。夫人の著書 *Our Life in China*⁹ も好評だった。1868年12月サンフランシスコを出帆、しばらく通州(Tung-chow)に滞在し¹⁰、1871年秋には芝罘(Chefoo)へ移った。

1877年の山東(Shantung)の飢饉では人口の15%が死亡した、といわれるが、このときもネヴィアスは難民救済に尽力した。1879年11月健康のためイタリーへ行き¹¹、欧州を経て1881年3月ニューヨークに着く。1882年秋芝罘に帰任¹²。1888年マーティンを北京に訪ねた。山東を襲った2度めの大飢饉でもネヴィアスの救援活動はめざましかった。改宗者のなかには食糧めあてのいわゆるライスクリスチャンも多く、将来に課題を残すことになった。ネヴィアスは信徒の自立を重視し、少ない出費で効果的な布教が期待できるとして、宣教師を頂点とした漸層的な新しい布教システムを提唱し、本部も長期間にわたってこれを支持したが、現地信徒はネヴィアスの期待どおりに行動してはいなかった。1890年彼はふたたび日本を訪れたが、1892年に一時帰国したあと体調を崩し、1893年10月19日山東省芝罘で生涯を閉じた。

2. 日本への影響

明治25年(1892)6月に発行された福音新報第65号と66号に、「日本の基督教文学」と題する植村正久師の一文がある。そのなかで師はネヴィアスの『天路指南』と『神道総論』をとりあげ、若年の師に強列な影響を与えたと記している。

⁷ 小沢 1939:2~6

⁸ J. L. Nevius *China and the Chinese* は東洋文庫所蔵の3書を確認している。1869刊と1872刊が本文450ページとAppendixで全同。1882刊(prefaceによる)は本文452ページでAppendixはなく、第21章(太平天国の乱)以下が増補改訂されている。3書とも“To My Wife/Helen S. Coan Nevius,/Ever My Most/Judicious Counsellor and Efficient Helper,/ This Volume is Inscribed”という異例の、愛妻への献辞をもつ。

⁹ H. S. C. Nevius *Our Life in China* は東洋文庫所蔵の3書を確認。旧版(刊年は確認不能)はマカオ付近とみられる図版が多く、1891刊には図版はない。いずれも”To My Husband,/The Rev. John L. Nevius, /I Dedicate/This Narrative/of/Our Life in China.”という、やはり異例の献辞をもつ。斜線は改行をしめす。

¹⁰ 小沢 1939:6

¹¹ CR10:472

¹² CR13:393

切支丹禁制下の日本に、中国語で書かれたプロテスタント宣教師の著作は、ひそかに、しかし滔々と流入して、漢文のできる日本人知識層に読まれていた¹³。邪教であり禁制であるキリスト教が、西洋近代学術の導入と密接な関連を保ちつつ、わが国に潜入したのだから、当時の有識の仏僧が特に問題視したのは当然であった¹⁴。

3. 夫妻の著作

3-1. 神道総論

小沢三郎 1939 : 14 につぎのような記述がある。「次にネヴィアスの作品に訓点をほどこし、基督教伝道のために使用したものがある。それは日本のプロテスタント教会の元老奥野昌綱師が訓点を付け、同じく元老、原胤昭氏が出版したものである。訓点神道総論第1巻 米国倪維思著、日本奥野昌綱訓点、東京原胤昭出版、明治十四年二月敬字中村正直序、同三月廿五日上巻出版、定価四十五銭。(中略) 筆者は之の上巻即ち第一巻丈けは手にしたが、あとは見てみない。(中略) 訓点づきが切支丹高札撤廃後出版されたのだから、之は基督教に志す者に相当利益を与へた事だらう。ネヴィアスの日本へ及ぼした影響はかうなると、見逃す事はどうしても出来ない事になる。(後略)」

小沢のいう‘上巻即ち第一巻’は国会図書館蔵、和図書、書誌 ID 000000467166, YDH20607。第二巻と第三巻も国会図書館蔵、和図書、書誌 ID 000000467390, YDM20831。いずれもマイクロフィッシュでのみ閲覧可能となっている。

3-2. *China and the Chinese*

1868年、1869年、1872年に刊行、ついで1882年に改訂版が出た。中華帝国(the Chinese Empire)概観、国家と住民、孔子と儒教、科挙と学校、行政機構、道教、などについて述べ、改訂版では第21章「太平天国の乱」以下を増補している。以上4書とも‘To My Wife/Helen S. Coan Nevius,/Ever My Most/ Judicious Counsellor and Efficient Helper./ This Volume is Inscribed’ という愛妻に捧げる異例ともいべき献辞を載せている。前述のように、ネヴィアス夫妻はともに学識経験ゆたかで、布教のためには自己犠牲を厭わない理想的な夫婦として周囲の尊敬を集めていた。

国会図書館所蔵のつぎの洋図書2点を参照。(1)請求記号: 915.1-N5295c, 出版社: Harper & bros. New York, 出版年: 1868 (2)請求記号: 46-37, 出版社: Harper & bros. New York, 出版年:

¹³ 小沢 1939:10~15

¹⁴ 吉田 1997:584

1869

東洋文庫に保管されているものはつぎの3点。(1)請求記号: III-1-E-97, 出版社: Sampson Low, Son & Marston, London, 出版年: 1869 (2)請求記号: 7069, 出版社: Harper & bros. 出版年: 1872 (3)請求記号: III-1-E-98 出版社: Presbyterian Board of Publication, Phil. 出版年: 1882(prefaceによる)

3-3. *Descriptive Catalogue of Books and Tracts*

1853年から1901年に至る夫妻の清国滞在中に夫妻が翻訳するなり書くなりした本やトラクト(布教を目的とした宣伝用小冊子)を列挙したもので、1907年 American Presbyterian Mission Press が印刷し、上海で刊行した。夫人の序文に、‘この目録は不完全で満足できるものではないし、夫と私が作った本やトラクトのすべてを含むものでもない。夫はリストを残さなかったし、死後50年経った今となっては、すべてを復元することは不可能だ。連載されて本になったものもあるが、なくなってしまったものもある。匿名で印刷されたものもあり、他人の名が著者として記されたものもある’と書かれている。以下夫妻の著作を列挙する。夫人自身本やトラクトの売上げにはあまり興味を示さなかったが、実際には必要な情報なので、販売価格も提示されている。

3-3-1. J. L. ネヴィアスの著作: 天路指南(文理¹⁵); 宣道指帰(文理); 神道総論(文理); 祀先辨論¹⁶(文理) 賛神聖詩(官話); 馬太問(官話); 馬可伝略解(文理); 馬可福音注釈(文理); 使徒行伝注釈(文理); 使徒行伝問(官話); 羅馬書綱目附問(文理); 哥林多前書注釈(文理); 天牖二光(文理); 入道初学(官話); 両教辨正(文理); 真道解(文理); 各等門徒伝道本分(文理)

3-3-2. ネヴィアス夫人の著作: 耶穌教問答(官話); 孩童故事(官話); 梅莫氏行略(官話); 恒心守道(官話); 伝道模範(官話); 伝道模範(文理); 借債論(官話); 女四書(文理);

¹⁵ ‘文理’にはおおまかにいって浅文理と深文理の2種の文体があり、深文理に近づくほど品格があり、知識階級に好まれる。宣伝の対象をどの階層におくかによって、使い分ける必要があった。

¹⁶ 書名は‘祀先辨謬’か? 小沢 1939: 13 につぎのような指摘がある。「すでに述べた通りネヴィアスは祀先辨謬なる著述を出版してゐる。それを反駁した祀先辨謬なる書物が日本人の手で、しかも日本で出版されてゐるのである。(中略) 祖先崇拜を論難した作品は諸氏に依って書かれてゐるのに、ネヴィアスの祀先辨謬が面白くも反駁論文の巨砲を浴びせられたのである。」

布教する側からいえば、現地民の祖先崇拜は偶像崇拜に通じ、布教の妨げになると考えられていた。同じく小沢 1939: 9 には書名、トラクト名、刊行場所、刊行年、官話と文理の別など、小沢が独自の情報網を駆使して集めた詳しい情報が載っている。

勸放脚論¹⁷ (官話) ; 入門課 (官話) ; 小先知積義 (官話) ; 東山東羅馬字初学 (官話) ; 浅白祷告文 (官話) ; 書目冊 (文理)

3 - 4. *Demon Possessions and Allied Themes*

任地の山東における悪霊憑依の実例と福音書の記述との符合に驚嘆したネヴィアスは、おびただしい記録を残しのまま、1893年に世を去った。1892刊 (preface による) の初版と 1896年刊の再版改訂版の、同文の *Introductory Note* から引用する :

Whatever the world at large may think, the native Christians of Shantung are as fully convinced both of the reality of demonical possessions, and of the available power of Jesus to remedy them, as were the deciples in the apostolic church. And the number of coincidences which Dr. Nevius has pointed out between these cases and those described in the Gospels and the Acts of Apostles is certainly remarkable.

(世間がどう思おうと、山東の現地人信徒たちは使徒教会の使徒と同じように、悪魔憑きが現実のものでキリストがそれを治す力をもっていると信じこんでいる。こうした実例と福音書や使徒行伝に書かれた事例との符合をネヴィアス博士は指摘したが、一致する事例の多さにはまったく驚くほかないのである。)

再版改訂版を著した F.F. Ellinwood 師は米国長老会に属し、東洋の宗教に造詣が深く、この種の一見怪奇と見える現象の解説者としてネヴィアス博士ほどの適任者はいない、と絶賛している。初版と再版の本文は全同(pp.9~394)、続く *Appendix* は再版ではテレパシーを扱う注釈が入り、使徒行伝、聖書その他 482 ページに及ぶ膨大な索引が初版にも再版にもついている。それでも足りないと思ったか、さらに *Supplement to Second Edition*(再版のための補遺)を補充して、執拗に異教徒の国の悪霊憑依の実態と聖書との関連を証拠だてようと試みている¹⁸。

¹⁷ 反纏足論。

¹⁸ *Appendix I(a) (MORE CHINESE INSTANCES)*

- (b) EXPERIENCE OF MRS. LIU
- (c) A CASE OF SUPPOSED POSSESSION IN SA-WO
- (d) CASE OF A SLAVE GIRL
- (e) CASE IN EASTERN EN-CHIU
- (f) A CASE IN SOUTHERN SHIU KWANG
- (g) EXPERIENCES OF CHIU CHING
- (h) THE CASE OF A FAMILY IN EN CHIU
- (i) EXTRACTS FROM A LETTER FROM MR. SHI OF SHAN-SI

Appendix II Other Testimonials (pp. 427~437)

Biographical Index (pp.439~460)

Biblical Index, General Index (pp. 461~482)

3-5. *Methods of Mission Work*

The Chinese Recorder 編集部の要請に応じて、ネヴィアスは任地の山東中央部の布教活動の実態を公開することにした。経験に基づく新しい布教方針を示したもので、本部の絶大な支持を得て出版、増刷を重ねた。ネヴィアスの主張に共鳴した若い欧米人信徒が多数海を渡ったが、現地のベテラン宣教師のあいだには戸惑いがひろがった¹⁹。

30年前に入華した宣教師は、ネヴィアスの呼称によれば‘Old Method’²⁰を採っていた。これとネヴィアスの提唱する‘New Method’²¹を比較すると、おおまかにいえば、前者が‘雇われた現地の代理人(paid native agency)’におおきく依存するのに対し、後者はそうした代理人を極力少なくする、ということだ。前者が第一段階で外国の資金を投入して現地教会の成長を促し、その後徐々に援助額を抑えていくのに対し、後者は自主独立を当初からの目標に掲げるといふものだ。Old Method に対する反論をまとめると、(1)新しい改宗者を代理人として雇うことは、その改宗者が関わる活動拠点に悪影響を及ぼす。(2)新しい改宗者を代理人として雇うことは、本人のためにならないことがしばしばある。(3)説教師であれ、教会員であれ、真実と虚偽の判断を危うくさせる。(4)金銭に執着させ、金銭で動く教徒の数をふやす。(5)金銭を支給されていない代理人のやる気をなくさせる云々²²。

以下ネヴィアスの New Method 談義は、1877年の飢饉²³前後の改宗者数の変化を踏まえ、ネヴィアス自身の体験を織りまぜて、延々とつづく。ヘルパーができることはヘルパーに任せて宣教師は手をださない。リーダーにできることはリーダーに、部下のやることは部下にまかせて、上司は手をださず監督と指令の徹底に集中する。このヒエラルキーが有効に機能すれば、少ない資金でみよりの多い結果を得ることができる、というのだが、実情はネヴィアスの理想とはほど遠いものだった。

Telepathy, Humane and Divine

Supplement to Second Edition (pp. ~520)

CR23:465~468に‘A Notable Meeting (注目すべき集会)’と題する南京在住の John C.Ferguson 師の報告が載っている。この集会でネヴィアスは‘The Phenomena of Demoniacal Possession in the Present Age (現代における悪霊憑依の現象)’と題して講演し、称賛を浴びた。

¹⁹ C.W. Mateer 1900:2 度重なる問い合わせにも拘わらず、ネヴィアスの膝元の山東からは反応がなかった。若いメンバーには高名なネヴィアスの理論に疑問をはさむことに対する戸惑いと遠慮があった。

²⁰ CR16:422, 423

²¹ CR16:422

²² CR16:461~467

²³ CR16:422; 17:55, 56; 31:164,165 飢饉の際に救済に尽力したことが、外国人は金持ちだと思ひこませる結果になった。事前工作はなかったにも拘わらず、飢饉救済は改宗者をふやした。

3-6. A Review of “Methods of Mission Work”

実情を察知した編集部への懇請に応じて、マティアは強い義務感から重い腰をあげた²⁴。マティアとネヴィアスは25年来の友人であり、夫人は存命中だった。”Methods of Mission Work”が公開されると、あきらかにその影響を受けたと思われる未経験の若者の投書がふえた。満州や朝鮮の状況が報告されたが、成功を疑う声も寄せられた²⁵。マティアはネヴィアスの理論の立脚点の不備を指摘した。現地人ヘルパーが報酬目当てとはかぎらないし、ヘルパーの信徒全体に占める割合は少ないのに、賃金を支払うと欲得づくでしか動かない信徒を養成するとかंगाえるのは行き過ぎだと評した²⁶。ネヴィアスとともににはたらき、ネヴィアスの理論を充分理解しているはずのJ.H. Langlin 師は、ネヴィアスにあたらしい活動拠点の運営をまかされたとき、現地人ヘルパーを拒もうとしなかった。外国人が現地人ヘルパーなみに現地人に影響を与えるなど、できない相談だ、外国人が直接導いて改宗させた例などほとんどない、というのが彼の実体験からくる結論だった²⁷。

ある宗派のメンバーになるということは、中国ではそれによって生活の資を得るということに通じる。こうした考えは基督教がもたらしたものではなく、長年にわたって仏教と道教が育んできたものだ。それを宣教師の誤った布教政策のせいだと言い募るのは、的はずれの議論というべきだ²⁸、とマティアはいう。

拠点の活動記録はすべてネヴィアスが握っていた。事情に最も通じているはずのリーダーが物故者であったり、行方をくらましていたり、棄教して信ずるに足りない情報を流したりしていた。ネヴィアスを書いて新任者に渡した記録の数字は水増しされており、ほぼ例外なくヘルパーの調査結果を上回った。何年も前に棄教したり、亡くなったりして、すでに忘れ去られている者もいた。活動拠点がすでに消滅していたり、崩壊寸前の状態に陥っているものも、いくつもあった。リーダーの3分の1はすでに基督教とは無縁で、ギャンブルやアヘンに手を染め、期待どおりの利益がえられなかったという理由で、カトリックに走った²⁹。ネヴィアスは新しい拠点を飛躍的に増加させたが、それは方策がすぐれていたためではなく、神慮のたまものともみるべきだろう。New Method に対する過度の期待と熱意がネヴィアスの眼を曇らせた。Dr.

²⁴ CR31:110 ‘In doing so I realize that my purpose will perhaps be misconstrued and my motives misunderstood. I write reluctantly and under a strong sense of duty.’

²⁵ CR31:112, 113; 39:461

²⁶ CR31:115

²⁷ CR31:112

²⁸ CR31:116

²⁹ CR31:118~121

Corbett は飢饉の際の食糧配布には参加しておらず、新方策をとったわけでもなかったが、飢饉に襲われた隣接地域で好結果を残している³⁰。

おわりに

J. L.ネヴィアスに関わる先行研究は、ネヴィアスの光の部分を取ったものがほとんどであった。本稿の目的は、ネヴィアス夫妻の著作の概略を紹介すると同時に、栄光に隠れて忘れ去られた影の部分、主として *The Chinese Recorder* の記録をたよりに、掘り起こそうというものである³¹。

ネヴィアス著 *Methods of Mission Work* は本部の支持を得て多くの読者を獲得し、欧米の若い信徒が布教の幻想に浮かされて海を渡ったが、現地での実情は期待を裏切るものだった。ネヴィアス夫妻とは25年にわたって深い友情を培ってきたマティアであったが、編集部の方々の要請を容れて、実情調査とその結果の公開にふみきった。

マティアはネヴィアスと並んで *The Chinese Recorder* の投書の常連であり、教育界の雄として知られる。1877年発行の第8巻では教科書をテーマとしてとりあげ、現地人教師と生徒の双方に目くばりをきかせた教科書をつくること、従来の暗記一辺倒の中国式教育法の弊を除く唯一の方法であると説き、術語の教えかたにも言及している。また1883年発行の第14巻では、中国の教育は過大評価されていると指摘し、トラクトの無償配布に警告を発した³²。マティアが登州に創設した学校は、のち発展して登州カレッジ（文会館）となった³³。マティアは現地の人びとにも敬慕され、葬儀の際参列者がマティアの功績をたたえて、卒業生のその後の行きかたを示す統計を読みあげる、という異例のできごとがあった³⁴。その伝記に D. W. Fisher 著 *Calvin Wilson Mateer, Forty-Five Years a Missionary in Shantung, China, 1911* がある。

³⁰ CR31:163~165

³¹ C. W. Mateer *A Review of "Methods of Mission work"*1900 は東洋文庫が1部所蔵しているが、現在原書は入手困難とみられる。

³² CR8:427~432; 14:463~469 中国の教育を過大評価するなという警告を発したのは、マティアがはじめてではないが、当時の宣教師にみられる、トラクト信仰ともいべき社会現象の流れを変えるには至らなかった。CR29:87~94 化学用語を扱う (Kerr, Fryer の用語との比較)。

³³ 宮田 2008:103

³⁴ 宮田 2008:103~108

参考文献 (*The Chinese Recorder* は上記)

H. S. C. Nevius, *Our Life in China* (旧版一図版あり、刊年不載)、(新版一図版なし。Hurst Co. 著作権取得 1891)

1895 *The Life of J.L. Nevius for Forty Years a Missionary in China*, Fleming H. Revell Co., New York

J. L. Nevius, 1892 *Demon Possession and Allied Themes*

1896 *Demon Possession and Allied Themes*

1899 *The Planting and Development of Missionary Churches*, 3rd ed.

Student Volunteer Movement for Foreign Missions

C.W. Mateer, 1900 *A Review of "Methods of Mission Work"*, The Presbyterian Mission Press

J. L. Nevius & H.S.C. Nevius, 1907 *A Descriptive Catalogue of Books and Tracts*, The American Presbyterian Mission Press

V. F. P, "J. L. Nevius D.D., a Hero." (新聞記事の切り抜き)

植村正久 1892 「日本の基督教文学」『福音新報』 65号、66号

小沢三郎 1939 「支那在留宣教師 J L ネヴィアスと日本との関係」『基督教史研究 6』

1944 「支那在留耶蘇教宣教師著作のキリシタン禁制下における日本への移入—特に破邪書を通して見たる」『幕末明治耶蘇教史研究』 亜細亜書房

1944 「支那在留耶蘇教宣教師の日本文化に及ぼせる影響」『幕末明治耶蘇教史研究』 亜細亜書房

熊月之 1994 『西学東漸与晚清社会』、上海人民出版社

吉田寅 1997 『中国プロテスタント伝道史研究』、汲古書院

中島耕二・辻直人・大西晴樹 2003 『長老・改革教会来日宣教師事典』、新教出版社

宮田和子 2008 「『英華萃林韻府』の術語集をめぐって」『或問』 第15号、近代東西言語文化接触研究会